

『韓国近代都市景観の形成—日本人移住漁村と鉄道町』

(京都大学学術出版会、2010年5月)

正会員	布	野	修	司	君
正会員	韓		三	建	君
	朴		重	信	殿
	趙		聖	民	殿

本書は、韓国の地方都市が日本の植民地支配の中で景観がどのように変貌し、日本化したのか、そして解放後はどのように変容していったのかを実証的に明らかにしている。政治的に難しいテーマに対し、日本の大学での留学経験をもつ韓国人研究者3名が真正面から取り組み、それぞれ学位論文としてまとめたものをベースにしている。第Ⅱ章を韓三建氏、第Ⅲ章を朴重信氏、第Ⅳ章は趙聖民氏が担当し、これに代表者である布野修司氏が序章、第Ⅰ章、終章を加えて、まとめられたものである。このように本書は4人による学術的な共同研究の成果であり、日韓の相互理解を深め、真の文化交流を発展させる価値の高い著書といえる。

本書の内容はまず、第Ⅱ章では、朝鮮時代に各地に置かれていた「邑城」が日本植民時期においてどのように変貌したのか、第Ⅲ章では、朝鮮半島の沿岸部に形成された「日本人移住漁村」の変容過程を、第Ⅳ章では、鉄道建設に伴い形成された「鉄道町」の日式住宅で構成される街区の変容過程を丹念に綿密に調べ、そのプロセスを明らかにしている。これらの各章は学位論文をベースにしているため、テーマも絞り込まれ、学問的水準の高い著書となっている。ともすれば退屈な内容になりがちだが、代表者がそれぞれの背景を理解しやすくさせるために、序章、Ⅰ章で朝鮮半島の歴史および植民地下での近代都市計画の導入について概観し、終章では平壤、ソウル、慶州などの都市景観の現在について整理している。そのため、理解しやすく、読み物としても面白く、かつ一冊の著書として巧くまとめ上げられている。

注目したいのは「日本人移住漁村」や「鉄道町」といったメジャーではない考察対象を選んでいる点である。日常的で身近な街並みと景観や居住空間を主な対象とし、それらがいかに日本化したのかを分析し、考察している点が斬新である。

また、日本の生活様式の移植としての日式住宅に関する精緻な分析と考察は、韓国近代住居史に対する理解をより深めるとともに「異文化の葛藤と同化」という重要なテーマに迫る優れた研究成果といえる。特に、日本人によって持ち込まれた空間構成が後に、韓国の伝統的な環境観や生活習慣によって大きな変容をとげた過程への洞察は見事であり、これらの学術成果を読みやすい図書にまとめあげたことは特筆に値する。

よって、ここに日本建築学会著作賞を贈るものである。